

婦看護婦法（保助看護）にひきつがれた。本法については、①看護婦に甲種・乙種の2種あること、②乙種に業務制限を設けたことなどに疑義が出された。昭和25年、看護制度審議会が設けられ、甲種・乙種の区別を廃して看護婦一本とし、別に看護助手を置くという案が出されたが、これと別に同26年、衆議院 青柳一郎ほか9名による議案が国会に提出・議決され保助看護の一部改正が行われた。本改正で①甲種・乙種の区別を廃する、②看護婦をたすけ看護の総力を構成する要員として准看護婦の制度を設けるとし、ここに新しい准看護婦（准看）が登場した。乙種看護婦は旧看護婦規則による看護婦試験に合格したものとみなされた。のち旧看護婦規則による看護婦は希望により無条件で新制度による看護婦として認められることになったから、乙種看護婦という資格の者はなくなった。オツカンと称された彼らはほぼ准看に対応する内容であったが、この段階で甲看との階級差がなくなり、乙看には有利な取扱いとなった。乙看は昭和26年に第1回の卒業を見、同29年に廃止された。

それまで看護婦養成所であったところは乙種看護婦養成所に転換したところが多かった（甲種看護婦養成所は国公立か日赤などがほとんどであった）が、これらはさらに准看養成所に名称変更するのが通例であった。准看教育は昭和26年に始まり同28年第1回の卒業を見、現在に及んでいる。

戦後の看護制度の改革についてはGHQ公衆衛生福祉局の圧力が大であったが、アメリカの看護制度は Registered Nurse (RN), Licensed Practical Nurse (LPN), Aides の3より構成され、資格を有しているのは前2者である。RN と LPN とは一線を画し、LPN の経歴を生かして RN へと進む道はない。アメリカは自国の制度をそのまま日本に強要はしなかった。ただ当時の公衆衛生福祉局のボス、サムス准将は准看護婦にあたる職種を Assistant Nurse（補助看護婦）と称するようという意見を出した。結局、准看護婦という名称はそのままとして、実態は Assistant Nurse とするということに落ち着いた。現在も准看護婦の英語表示は Assistant Nurse で保健婦を Public

Health Nurse と表わすのとともに、当時の世情を反映しているといえよう。

またわが国では准看から看護婦へのルート（2年課程、進学コース）が準備され、昭和32年に発足、同34年に第1回卒業生が出た。同37年にはこの課程の定時制（3年間）もできた。同39年には職業高校である高等学校衛生看護科が設置され、同42年にはその最初の卒業生をみた。

准看養成にもっとも力を注いだのは医師会である。開業医の戦力となるのは准看であるのがその最大の理由であるが、中卒者の高校への進学率が高くなるのに呼応して、准看資格取得と同時に進学コースに進む者が多くなり、単純な計算では約半数がその道を取るようになっている。さらに厚生省自らが看護婦需給計画を狂わす駆け込み増床、ゴールドプランを打ち出したことにより、全般に深刻な看護婦不足を招来するに至った。

看護関係の基本的な法規は保助看護法であるが、准看制度を導入した昭和26年以降約40年間で抜本的な改正は行われていない。21世紀を踏まえたあらたなビジョンが必要であろう。

51) 米国長老教会婦人宣教師ミス・

リードの日本における活動

Miss Reade's activities as a American
Presbyterian Church Missionary in Japan

平尾真智子

Machiko Hirao

ミス・リードは米国長老教会の婦人宣教師で、わが国で最初に看護婦の教育を行った人物である。彼女は1881年に来日し、1888年にミッションを辞任するまで約7年間日本に滞在した。今回、アメリカにある長老教会の歴史資料館でリードに関する資料を得る機会があり、それにこれまでに得られている日本側の資料を加えて彼女の日本での活動をまとめた。

リードはニューヨーク婦人伝道協会の所属であり、1881（明治14）年10月29日に来日した。そして現在の女子学院の前身であるグラハム・セミナ

リーで I.A. リート, ミス・スミス, L.A. リートらと一緒に働いた。彼女はここでアシスタントをし, 1 日 2 時間教えている。彼女は日曜学校もしていて, 参加者も多かった。また, 1883 年から 1884 年までのミセス・ツルーが帰米している期間にリードは桜井女学校でミス・デービスを補佐した。

長老教会のジャパンミッションは, 1884 (明治 17) 年 9 月 24 日に東京の慈善病院の医師高木兼寛の要請で会議を開き, 10 月 3 日リードが病院で仕事することが許可された。高木がリードを病院に招くことができたのは, 長老教会の婦人宣教師たちの慈善病院への伝道活動がきっかけとなったとも考えられる。リードと同じニューヨーク婦人伝道局派遣のミス・ヤングマンの開設した築地第一啓蒙夜学校の生徒は, 明治 16 年から毎週土曜日に果物と草花を持って慈善病院の慰問を行っていた。また, マクネア夫人やブライアン夫人はフラワーアンドフルーツミッションと称して明治 17 年より慈善病院の訪問を行っていた。

リードは 10 月 17 日より慈善病院の有志共立東京病院を訪れ, 以後毎週金・土の両日看護法を教授した。1885 (明治 18) 年 1 月 7 日より 2 年間無給で同病院に勤務する契約がなされた。彼女の勤務時間は 1 日 4 時間で下婢 2 名と部屋を 2 つ用意された。また, 病院内におけるキリスト教の伝道も許されており, 入院患者にイエスの話をしている。彼女は病院で貧しい病人の看護を行った。同年の 3 月からは成医会医学校の医学生に英語を教授している。リードは病院で, 派出看護の仕事の準備にあたった。リードは病院に住みすべての時間を病院での時間に捧げていた。彼女は病院にいた 2 年間に看護婦帽子 54 個, 看護婦前掛け 26 枚, 団扇 26 本, 哺乳器などを寄付している。リードは日本の慈善病院での活動を本国の婦人伝道局の機関紙「婦人のための婦人の仕事と私たちの伝道地」に報告している。リードは看護婦たちを新栄教会に導き, 彼女に教えられた看護婦たちはクリスチャンになるものが多かった。

米国長老教会では, リードの慈善病院での活動とは別に, 明治 19 年に桜井女学校のミセス・ツルー

がバラ夫人の遺志を継ぎ, 日本に看護婦の養成所をつくるという計画をもっていた。看護学校開設のための資金も集められたが, 看護婦養成は宣教師の本来の活動ではないとする, ミッション内部からの反対もあってこの計画は順調にはすすまなかった。リードの病院での活動と, ツルーの看護学校の計画は, 本国の婦人伝道局の機関紙の日本欄に同時に報告されたため, 本国でもこの 2 つの養成は混同して理解されていた。

リードと高木の契約は 2 年間であったが, 契約の期間を越えた 1887 (明治 20) 年になっても彼女は病院での仕事をしていた。彼女の本来の仕事は女子教育活動にあったが病院での看護教育活動に熱心で, このことが宣教師としての職務から逸脱した行為とみなされるようになっていったようである。その後リードは新栄女学校 (グラハムセミナリー) に戻り, 日曜日には聖書のクラスも継続し, 生徒に音楽を教えた。1888 年リードはミッションを辞任し, 5 月 19 日に英国船ザンベンシ号でアメリカに向けて帰国した。

リードは日本で最初に看護婦を教育した人物であるが, その人物的背景には不明な点が多い。彼女の日本での活動は, 日本の看護教育の導入期の事情を知るうえでも鍵となるものである。リードがニューヨークに関係があることから同地の長老教会病院の関係者である可能性も残されているので今後も調査を継続したい。

52) 外科の守護聖人サン・コームと

リュザルシュ村の教会

St. Côme, patron of surgeons, and his church in Ruzarches (France)

慶應義塾大学医史学研究室 大村 敏郎

1990 年 11 月, アンブロアズ・パレの没後 400 年祭に参加のためフランスを訪れた際に, パリから北へ 30 キロの所にあるリュザルシュ村を尋ねることができた。そこにはサン・コーム (St. Côme) 教会があるのである。

13 世紀に発足したパリの外科医組合の守護聖人